



「箱の中のX」紹介文

岡和田晃

〈山野浩一未収録小説集〉の第四回目は、「月刊タウン」（アサヒ芸能社）の創刊号（一九六七年一月）に発表された「箱の中のX」です。

写真をふんだんに設えた男性向けの情報誌で、「プレイボーイ」のようなアダルトな記事もあれば、ヴェトナム戦争の模様などもレポートされています。

ここに掲載されたショートショートが、「箱の中のX」でした。二回目からは「四百字のX」シリーズと銘打ち、「X塔」（二号、一九六七年二月）、「同窓会X」（三号、一九六七年二月）といった連載になっています。

やはり目を惹くのは、手書きの見開きという

2 レイアウトになっっていることでしょう。

原稿用紙一枚で何ができるか。

興味深い挑戦で、こうした縛りでコンテストをやってみても面白いかもしれません。

なお、コピーの際に中央の綴じ部分が読めなくなっているので、私が欄外に当該箇所を鉛筆で添えたものです。

続報ですが、「数学SF 夢は全くひらかない」の初出が判明しました。川又千秋さんのニューウェーブSF誌「N」の十一号（一九七一年四月頃、奥付がないので推定）でありました。

もとは「プラネットイド」という名前でしたが、七号から「N」に改名し、十一号は「N」になってから五冊目。

同じ号に大和田始さんの批評「造反無理・革命有罪」が掲載されています。

なお、これにはちよつとしたこぼれ話がありました……。

岡和田が、まさにこの「造反無理・革命有罪」を調べている際、偶然、存在を知った

原稿なのですね。それでコピーを山野浩一さんに送ったので、山野さんの遺品から出てくることになったわけですが、私はすっかりお渡ししたことを忘れてしまっておりまして。でも、山野さんはちゃんと持っていてくださったのです。

今になって、ようやく当時の様子が思い出されました。山野さんも、「数学SF 夢は全くひらかない」を書いた時期のことは、忘却の彼方にあつたようでした。

あまりにたくさんさんの資料を整理していたがためですが、お恥ずかしい限りです。

ご協力いただいた、佐藤正明さん、林芳隆さん、三浦祐嗣さん、本間邦博さん、安田圭一さん、巽孝之さんに改めて感謝します。